

〔研究ノート〕

# 高次脳機能障害者支援における共生のための 手立ての研究にむけて

—当事者との本づくりから見えてきた研究における  
キーワードとして—

山 本 永 人

## はじめに

高次脳機能障害は、頭部外傷や脳血管障害を起因とする脳損傷の後遺症であり、その事が原因で社会生活に大きな影響を与えるものとされている。現在、30万人から50万人の当事者が日本国内にいるといわれ、介護福祉士養成の教科書にも相当の文面をさかれて紹介されている。

そのおもな症状として、「記憶障害」「注意障害」「遂行機能障害」「社会的行動障害」の4つがあげられている。具体的には、新しい出来事が覚えられないとか、自分で置いた場所を忘れてしまうとか、作業をしているときにぼんやりしている、自分で計画を立てても実行できないなどの文言が教科書やパンフレットに並んでいる。

この研究ノート執筆のきっかけは、筆者が東大阪市にある東大阪市立療育センター「はばたき園」で児童指導員をしていたときに会ったボランティアのK・K（以下、「K」という）との出会いとその後の協力関係にある。Kとの出会いは1991年の春だったと記憶している。もう30年近くの付き合いになる。

Kには高次脳機能障害がある。1989年の4月に当時レントゲン技師を目指していたKは、専門学校の帰宅途中に原付バイクで交通事故に遭遇し、頭部を強打、この障害を受傷した。

周知の事であるが、この障害が国をあげて本格的に福祉の課題として取り上げられたのは2001年厚生労働省が取り組んだ「高次脳機能障害者支援モデル事業」が端緒だ。K自身も国立重度障害者センターのモデル事業に当事者として参加している。筆者とKが出会ったころには、この高次脳機能障害という言葉も存在しなかった。当然Kが療育センターにボランティアとして現れた時には、そのような事情は知る由もなかったのである。

Kはいつも教科書やパンフレットの表現に憤る。同じ事を何度も質問する、人に指図されないと何もできない、相手の気持ちや状況にあわせた発言や行動ができない。すぐに怒り出す。ネガティブワードの羅列である。できない事のオンパレードと言っても過言ではない。その事にKは強い拒否反応を示す。

Kの当事者本を出版する手伝いをする機会の中で、Kの実際の暮らしや職業活動を通じて体験した障害について、さまざまな思いや感情をともにする経験をする事ができた。この研究ノートは、

今後の研究にむけ、そのキーワードとなるものを簡単に整理し、次につなげるためのものである。

## 1. 研究の方向性

研究の目的としたほうがよいのかと考えるが、この研究ノートはその研究の一里塚としてその方向性を明示するというほうが近いように感じるので、このような表現にとどめる事とする。

「障害」とはどう捉えるのか。このような問いかけをすると問題が大きくなるようにも感じるが、実際の障害者支援のなかで障害者に対するスタンスを考えると、この問題は重要になる。ICFを持ち出すまでもなく、「障害」は個人モデルであるのか、社会モデルであるのかという点で様々な議論がなされてきたのは周知のとおりである。我が国の障害者基本法でも、障害は社会モデルの立場で説明されている。

2012年9月、大阪市は『「障害」の「害」のひらがなの表記の取り扱いについて』をホームページ上に掲載し、いくつかの例外を除いては、「障害」を「障がい」と表記する事を明示している。このムーブメントは一定の広がりを見せ、とくに小中学校の教科書には「障がい」の表記が多く取り入れられている。大阪市はその理由を「障がいのある人の思いを大切にし、市民の障害者理解を深めていくため」<sup>1)</sup>としている。

Kは、このムーブメントにも疑問を投げかけている。Kの言葉を借りれば、「名称は人間の表札のようなもので、それを変えても中身は何も変わらない」との言であった。筆者もこのムーブメントには違和感を覚える。「障害」の表記を「障がい」と変更する事は、その問題を個人モデルに集約する事が前提となる。社会モデルで示されるように、その障害のありかは「人」と「環境」との相互作用における接点にこそ存在するものである。だとするならば、当事者の感情はおおいに理解できるとしても、わざわざ表記をひらがなにする必要はあるのかと考える。

その是非はともかくとして、注目したいのがKのそのような当事者としての憤りである。Kの当事者本の作成を手伝う経過は後述するとして、Kの高次脳機能障害を受傷してからの出来事を追体験する中で、様々なキーワードとなる問題点が浮かんできた。

その内容をいったん研究ノートとして整理をする事で、軽度の高次脳機能障害の生きにくさがどのようなものであるのかを明らかにしたい。できれば、Kが経験してきたような実務レベルでの軽度の高次脳機能障害の人々への支援の大切な点をまとめる事により、今後の支援の在り方の考察への一助となる事を目指す事とする。

この研究はケーススタディである。そして、Kの憤りの研究である。Kの憤りの中に何か昨今の障害者支援の問題点が存在するように思えてならない。従って、まずは研究ノートとしてその憤りの中身をレビューする事から始める事とする。

## 2. Kの状態像と本づくりの経過

### (1) Kの状態像について

この研究はケーススタディであるため、Kの状態像について綿密にアセスメントし、その結果をここに表記する事が重要である。前述のとおりKは厚生労働省が取り組んだ、「高次脳機能障害者支援モデル事業」に参加している。2008年には千葉県の幕張にある「障害者職業総合センター」で、訓練・判定を受けている。

Kはこの体験にも憤りを隠さない。「私自身、モルモットであった」というのが、Kの簡潔な印象である。筆者も判定結果の資料を見せてもらったが、Kの能力的な弱さが何点か指摘されているだけのもので、何の意味があるのか正直ピンとこなかった。筆者自身のストロングポイントは、Kとの30数年来の協力関係である。そのエピソードの中でKの状態像を説明する事を試みる。

Kとの出会いは、前述の通りだ。筆者が東大阪市立療育センター「はばたき園」で児童指導員をしていたときの事である。まったくのアポイントもなく、突然姿を現したKは、満面の笑みで、「僕は子どもが好きなんです。ボランティアをさせてください。」と申し出てきた。たまたま、筆者自身がいるクラスで受け入れる事になったKの印象は、子ども好きの活発な好青年というところだ。しかし、ときどきその言動に軽い違和感を感じる事も幾度かあった。性格的にとても好奇心があり、物怖じしないKとは馬が合った。その年の暮れに気の合った仲間たちと九州旅行をする企画が持ち上がった。何の気なしにKを誘った旅行中におこったエピソードが印象的であった。

1997年12月の旅行は、レンタカーを使い、大分の別府から桜島までゆっくりと時間をかけてのドライブ旅行であった。桜島の外周道路の小さなパーキングエリアでトラブルは起った。本当に小さなパーキングエリアで縦横50メートルにも満たない広さであった。パーキングの小さなトイレにKと二人で向かった。用を先にすました筆者は、先に仲間たちが待つレンタカーに戻った。一抹の不安はあったが、まさかこの狭い駐車場でKが迷子になる事は全く想像していなかった。

Kは、トイレから出てきて筆者がいない事にパニックになったとの事である。「真っ白になった」と後日表現してくれた。「リセットされる」という表現のほうがよいのかもしれない。とにかく「ない」という感覚にとらわれたようだ。なんの事はなく、Kはトイレの反対側の入り口に出てしまっただけの事である。でも、ないものはしかたがない。そこで目の前にある外周道路をとぼとぼと歩き出したというのが顛末だ。

一方、いくら待っても出てこないKに業を煮やした筆者たちは、トイレのすべてのドアを叩いて、Kを探した。まったくもぬけの殻である。正直困惑したが、なぜか外周走路を歩いているのではと筆者は思った。半信半疑の友人が運転する車の先にやっとの思いでKの後姿を見つける事ができたのである。

この研究ノートはKの憤りに着目する事が大切な点であるが、この時は友人の手前筆者ははかなり激しく怒ったような記憶がある。Kにすれば、何を筆者が怒っているのか理解できなかつたと振り返っ

ている。でも、自分が何か大きなミスを起こした事はわかるのでひたすら恐縮したそうだ。

Kは「短期記憶」ができない。この結論は早計であるし、Kの状態像をすべて言い表せているとも思えない。確かにKは、朝に何を食べたのかはまったく覚えていない。トイレに入って手を洗って、ハンカチで水分をぬぐい、身だしなみを整えて出てくる。この一連の流れはほぼ覚えていないようだ。しかし支援者は、「手洗い所をビショビショにしないできれいにしてトイレを使用してください」とKに指導するそうだ。ここにもKは憤る。細かい事を覚えていないのに、そのような対応ができるのかどうか筆者も同感である。

では、Kは大切な事は覚える事はできないのであろうか。そのような事はない。Kとの約束をKが忘れた事は皆無であると断言できる。むしろ、筆者のほうが約束を忘れてしまう事がある。それには理由があるのだ。Kの記憶の方法がおもしろい。その工夫がユニークなのだ。

## (2) 当事者本づくりの経過

前述のようなKのオリジナルな生活の工夫を本にすれば、高次脳機能障害の当事者本として面白いものになるのではないか。Kの本を作ろうという企画が生まれた。ただ、この発案にも背景がある。

東大阪市で長年障害者支援に携わってきた筆者は、その縁もあり、さまざまな大切な知己を得る事ができた。Kもその一人であり、概して支援者と言われる人よりも、障害のある人や、障害児を育てる母親など当事者の人々に影響を受けたというのが本当のところだ。

最近になって、事業団の先輩から声がかかった。職場を同じくした事はないのであるが、療育という点でとても影響を受けた先輩である。Kが事業団を退職後、再就職した職場のアフタータイムを使い、小さな勉強会を開こうというのだ。

勉強会というよりも愚痴のこぼしあい会といったほうが良い雰囲気、先輩の人脈もあり、様々な福祉を現状リアルに取り組んでいる人々が集まり、月1度のペースで2時間ほどのフリートークを行う。これが、2年半ぐらい続いている。先輩の発案で「カフェ・ふくろう」と名付けた。

1990年代の後半から2000年にかけてわが国で行われた社会福祉基礎構造改革の成果はなんととっても高齢者福祉に介護保険が導入された事である。その評価や賛否はともかくとして、措置制度から利用契約制度に大きく福祉は転換した事は周知のとおりである。その中でも、福祉にコンシューマリズムが導入された事は大変大きな変革であった。

福祉サービスが商売により提供される。この事の評価こそが大変重要であると筆者は考えている。

この商売に翻弄される人々や、むしろそれをビジネスチャンスとしてベンチャー企業のように新しい福祉を切り拓く人々の愚痴は本当に興味深いものであった。しかし、単に愚痴のこぼしあいではもったいない。その取り組みや、過ごしてきた時間の中で、その人におこった事やその人の目から見えた風景をストーリーとして掘り起こし本づくりをしないかという発案が先輩から出された。社会福祉基礎構造改革前夜から現在にかけて福祉に取り組んでいるもののナラティブ・アプローチを、小さなカフェから立ち上げていこうという試みであった。

Kの本づくりは、そんな背景から始まる。そして、その本づくりの校正を頼まれたのが、Kとの関係が深い筆者だったという経過である。校正は軽い気持ちで引き受けた。しかし、Kが持ってきたものを一読した時正直困惑した。文章が怒りで満ち満ちているのだ。しかも、それが繰り返し繰り返し循環しているものだった。誤字の修正や簡単な文節や段落の調整ぐらいと考えていた筆者は、どうしたものかとはたと考え込んでしまった。

Kには、本学でも「障害の理解」等の授業で外部講師に招いた事も何度かある。やはり、当事者の言葉は迫力がある。学生たちの理解にも大きな効果があった。その大切なエッセンスが、長い文章の中で、いかえれば怒りの文章で埋もれてしまっているという印象だった。これでは、到底読者にそのKの真意を伝えるのは困難だと予想された。

確かに著者と校正をする者には一定のルールがあるべきである。著作権の問題などの事もリンクする。でも、筆者は腰を据えた。Kの本づくりに自分なりの方法で徹底的に付き合うこととした。

それから地道な作業が始まった。筆者の仕事の都合もあり月に2回程度のセッションしかもてなかったという点も大きい。作業は遅々として進まなかった。Kの下書きを、これはどのような事を指し、どのような意味があるのか、徹底的に討論していった。むろんKの真意から外れる事のないよう細心に注意した。それを文章に整理していくのである。でも、次のセッションではせっかく直した文章をKはあっけらかんと修正してくる。正直、元の木阿弥であった。業を煮やした筆者は一度修正した事は直さないというルールで今も作業は続いている。一回のセッションで5ページが限界、Kの本は100ページに及んでいた。

でも、この作業はおもわぬ副産物を筆者に提供した。それは、高次脳機能障害を受傷してからのKの生活ストーリーを追体験できたという事である。作業する中で2人してKの体験やそこから導き出された意見や知恵を試行錯誤を重ねながら言葉に落としていく。徹底的に向き合って討論を重ねた。大変頭の疲れる作業であった。そこで、帰宅時には近くのボウリング場に行き、一運動してから帰るといふ定番も思わぬ副産物である。

校正作業といえるかどうかは疑問であるが、その間筆者自身が自分に課した課題は2つであった。一つは、繰り返し繰り返し循環になっている文章をシンプルにする事、もう一つは、Kの怒りに満ちた攻撃的な文章を抑制する事の2点である。それが作業の中心であった事は間違いない。そして、その事がKがその人生の中で高次脳機能障害者として感じた憤りに向き合う事を意味した。

その中から、筆者はキーワードとなる言葉を焦点化する事ができた。すなわち、「小さな溝」「逆算」「豆腐屋さんと高次脳機能障害」という3点である。Kとの討議の中に頻出して現れたキーワードである。

高次脳機能障害をどのように読み解くかという事は大変難しい課題である。その理解というものがうまくいかなければ支援自体が頓珍漢なものになってしまう。Kの憤りはその頓珍漢な支援の裏返しでもあり証左でもある。このキーワードは研究の対象になる。

この研究ノートでは、この「小さな溝」「逆算」「豆腐屋さんと高次脳機能障害」の中身を簡単に整

理を行い、高次脳機能障害者支援における共生のための手立てを研究する入り口としてまとめたものとする。

### 3. キーワード① 「小さな溝」

本づくりをして初めにぶつかった事は、Kが教科書やパンフレットを蛇蝎のごとく毛嫌いする点にある。「障害の理解」という教科書をパラパラとめくり、「このようなものはまったく役に立たない」と冷笑し、ぼんと机の上に投げ出した姿が印象的であった。

たしかに、教科書の記述は症状が中心である。前述もしたが「記憶障害」「注意障害」「遂行機能障害」「社会的行動障害」の4症状はどの教科書にも出てくるし、それは「〇〇ができない」という表現になっている。Kはそこに憤るのである。自分はできるのにと居直ったような態度であった。

筆者自身、教科書の症状と障害を混同した書き方は問題があると考えている。しかしながら、確かに症状の記述が過多ではあるとしても、その理解は不可欠だと考えていた。たとえば、記憶の障害である。Kの状態像を説明するのに鹿児島県の桜島でのエピソードを紹介したが、あの時点ではKの脳の中におきているトラブルについては筆者自身は全くの無理解であった。あの狭い駐車場でレンタカーを探す事もなく、目についた外周道路をトボトボと歩いていく。それがどれほど無神経で無軌道な事か。でも、Kの頭の記憶の機能が、ほとんど日常の些細な事を覚える事ができないという機能的な問題を筆者が理解していれば話は全く違う。Kは車からトイレにいたる道順をまったく覚えていなかった。そして、用を済ましてトイレから出てきたときに筆者がいなかった時点で、Kが表現する「真っ白になった」「リセットされた」「ゼロになった」状況に陥ったのである。その症状を理解すれば、幸いにして再会できた時点での筆者の態度はまったく違うものになったはずなのである。あれほど怒りたける事はなかった。

その事をKに伝えた。反応は意外なものだった。「山本さん、それはどうでもいい事なのです。」と答えた。Kの頭の中で起こった事は別として、筆者たちの混乱も深刻なものであった。そのように言われれば、Kが不遜な人物に見える。

でも、Kは非常識な人間なのかという疑問は残った。性格の問題では済まされない大きな背景がある。Kとボウリングをしているときは無邪気で素直な青年である。筆者自身、Kと付き合ううえでのルールがある。たとえば、難波で待ち合わせの場合は、必ず進行方向（Kは梅田方面からやってくる）の一番前の車両の下りたところで出会うのが習慣となっている。その習慣が身についてからはKと筆者が難波で待ち合わせに困る事はない。Kは知らない事であるが、知らない場所でトイレに行く場合は、筆者は必ず出口の見えやすいところに身を置くように心がけている。そうすればトラブルは起きない。Kのメルクマールになるのだ。そうすればKは迷子にならない。

そのようなこちら側の努力は露とも知らず、「どうでもいい事なんです。」という言葉はショックであった。でも、Kが言いたい真意はどうやら別の次元にあるようだ。Kは、その職歴の中で農業を志す。

「どうも集団で仕事をするのは苦手です。最初のうちはいいのですがだんだん小さな溝ができてきて。」

筆者は、この「小さな溝」というキーワードに注目したい。まさに、症状ではなくこれこそが障害である。

Kは、短期記憶はできない。これはイエスでありノーである。筆者たちは、障害を考えるときにどうしても「できる」「できない」の2項対立で考えてしまう傾向がある。Kは物事を記憶する必要があるときには「大切な事」と「どうでもいい事」に振り分けるとの事だ。そして、「大切な事」は忘れないように手立てを用意する。例えばカレンダーに付箋をはり、その予定を必ず目につくところにおいておくとか、言葉を頭のなかで繰り返し、繰り返しリフレインする事でその単語を定着する作業を行うとかの彼なりのルールがある事を本の中で紹介している。頭の中で覚えるのではなく体に刷り込ませるという表現が印象的だ。この記憶を作る作業が記憶を保持するためのコツであるそうである。従って「どうでもいい事」は記憶の作業の俎上に乗らない。だから、記憶には残らない事になる。

「どうでもいい事」にこだわっているのは誰であるのか。すくなくともKではない。Kには記憶がないのだからこだわりようがない。失礼だとこだわっているのは鹿児島的事例で言えば筆者自身なのだ。

Kのエピソードのなかで「できる」「できない」という2項対立の図式を今少し考察してみたい。Kは車が運転できる。これもイエスでありノーである。運転できないものと利用できないものがある。先ほども述べた通り、Kの記憶の方法は身体に刷り込ませるという方法が適切なようだ。いったん刷り込んだ記憶ややり方は変更できないというところも見逃せない。車の運転はミッション車の運転しかできない。体にその運動記憶が染みついているからだ。だからオートマ車は運転できない。

こんな話もしてくれた。Kはカーナビが使えない。Kの目的地までの道順の選択は、点と点を結ぶという手立てが有効であるようだ。目的地からさかのぼって、保育所のピンクの看板、商店街の中華風の門、神社の桜の木、目に入る目印を結んでルートを組み立てる。従って、目印のないカーナビは全く使えないようだ。つまり、「できない」という観点でKの車の運転を評価すれば、カーナビを使ってオートマの車では運転ができないという結果となる。

しかし、Kにとってはカーナビの搭載車であろうがなかろうが、オートマチック車であろうがミッション車であろうが「どうでもいい事」なのである。要は手立てが肝心であって、かつ目的地に車で行ける事が大切であると強調する。結果が正しければ問題はないというわけだ。

繰り返しになるが「どうでもいい事」にこだわっているのは誰なのか。それはKではない。支援者であれ関係者であれその周囲の人間という事になる。小さな溝を作っているのは筆者たちの「どうでもいい事」へのこだわりである。

その段で教科書を見ると確かに片手落ちのような気がする。症状の上での「できない」事にこだわわるのではなく、できるための手立てを実用の暮らしの中で紹介する事が肝要であるとKは訴えている。「できない人」とのレッテルがKを苦しめ、その事がKの教科書嫌いにつながっているとい

うのはよくわかる図式である。

#### 4. キーワード② 「逆算」

次にKとの一連の本づくりの作業を通じてKが頻回に使った言葉に「逆算」というものがある。様々な社会生活における行為を行う際に軸となる考え方や手立てであるとの事である。Kは、この段取りや逆算のあらましを掃除を例にとって以下のように説明している。少し長くなるが引用してみる。

「たとえば、掃除の事を例にとって説明します。読者のみなさんは、自分の部屋が散らかって汚れていた場合は、どのように掃除に取り掛かるでしょうか。おそらく、これは私の想像ですが、多分、手元のものから順番に片付けると思います。結果的に部屋はいつのまにか片付いたと言うかんじなのだと思います。

でも、そのようなやり方は、私にはあわないのです。私の行い方は取り掛かる前に、片付いた部屋の最終的な状態を最初に確定する事で、私自身のやり方にどのようにしてはめ込むのか、どうすればよりラクに、より短時間に終らせるのかを考えます。」<sup>2)</sup>

最初はなにを当たり前の事を言っているのだと感じた。そのような工夫は誰でも行うありがちなものだ。でも、あまりにこのフレーズが頻出する。筆者自身も何度もKとのセッションを経験する中で、ここに高次脳機能障害者と健常者と言われる人々との間に起こる齟齬の重大な原因があるのではと考えるようになってきた。

Kはそのような齟齬を「小さな溝」と表現し、営業などの集団生活の中で段々気が付かないうちに生じるものだと述べている。Kのエピソードの中でこの「逆算」にまつわる印象的なものがある。先ほど引用したKの本の最後の部分に注目されたい。Kのやり方は、最終の到着点を決め、どのようにすれば楽になるのか、どのようにすれば短時間でできるのかという観点で、自分の行為や行動を組み立てると述べている。そうする事により、自身の行動をシンプルにし、簡素化する事で心と時間に余裕ができる事が重要だと指摘する。

Kの行動で一つ閉口する事がある。それは集合時間にかなり早い目に現れるという事だ。その行動を「早め早めの行動」とKはよく口にする。Kなりのルールと言える。しかし、かなり時間前に研究室にKが来る事は、筆者にとっては迷惑だ。仕事を立て込んだ時の時間配分は分刻みで行うものである。Kが到着すると段取りが狂ってしまう。何度か修正するように伝えた。すると早い目に到着したKは、研究室に入る事なく学舎のそばの道路で汗まみれになって時間をつぶしてくれた。それはそれで気の毒である。結局、Kのいう「早め早めの行動」は修正される事はなかった。

Kがガイドヘルパーの派遣事業所で働いていた時のエピソードである。その事業所はガイドヘルパーの仕事とともに放課後デイサービスも運営していて、Kはどちらの仕事も兼ねたスタッフであった。利用者の自宅への迎えの時間が迫っていたKは、「早め早めの行動」で「逆算」すると出発時間は4時40分となった。ところが、デイサービスの終了時間は5時であった。でも、スタッフは揃っ



ている。片づけはほぼ完了し子どもたちも帰宅時間を待つばかりである。そこで、Kはガイドヘルパーの仕事に向かうために事業所を出ようとした。すると、デイサービスのリーダーから、「なぜ、そんなに早くでるの？5時まではここにいてもらわないと困る。」というクレームが出たそうだ。筆者の感覚からすれば当然の指摘だ。でも、Kの行動は修正される事がなかった。次の日も、その次の日も4時40分になると当たり前のように事業所を出発してしまうのである。その事が退職のきっかけになったそうである。Kの立場から考えると、利用者の家から「逆算」し、自身のメルクマークを点と点でつなげ、そこから設定した時間が4時40分ということになる。この時間が狂えばすべてご破算だ。周囲の状況から考えれば、時間を早めるほうがより重要であり、5時までそこにとどまる理由が理解できないという組み立てになる。

筆者はこの研究ノートのテーマを、「高次脳機能障害者支援における共生のための手立て」とした。共生が重要なのである。つまり、Kと筆者たちの行動や行為の組み立て方が異なっている。あたかも「逆算」と「順当」のすれ違いと表現できる。重要なポイントはKの「逆算」から組み立てた「早め早めの行動」にはKの高次脳機能障害に原因する障害の回避行動という意味があるもので、かつ一度組み立ててしまえば修正が非常に困難であるという理解であろう。「自分のルールははずせない」とKは語っている。

一般に我々は結果に向かって行動する。そのほうが合理的であり、集団としての共通の理解やルールを組みやすい。今、少し言えば、そのほうがより大きな成果を導き出せる近道とすることができる。しかし、Kは結果から行動を「逆算」する。そうしなければ結果が分からなくなってしまうと述べていた。その行動は尊重されるべきである。その行動に修正を迫られたり、干渉される事は大きなストレスであり苛立ちや憤りを感じるとの事である。「逆算」と「順当」の齟齬にこそ、この障害特有の課題があるのだ。

## 5. キーワード③ 「豆腐屋さんと高次脳機能障害」

Kの当事者本は、Kの半生の物語である。Kはその中でいくつかの職種を経験し、さまざまな福祉サービスを利用してきた。高次脳機能障害と診断され、障害者手帳も取得した。だが、そのような福祉の営みがKの生活や仕事に万全なよい影響を与えたとはとても思えない。むしろKの憤りを本の端々に感じ、校正作業はいつしかその怒りと向き合うディスカッションの場に変容していった。

「小さな溝」や「逆算」のエピソードでも紹介した通り、集団での仕事に小さな溝を生じ、ネガティブな体験を重ねたKは次第に農業を志すようになる。そのほうが、作業は個人的であるし、「逆算」からの行為に干渉や変更を求められる事はない。

「豆腐屋さん」も「高次脳機能障害」も枕詞とよくKは表現する。「豆腐屋のKさん」なのか「高次脳機能障害のKさん」なのか、正体はどちらかであるのかというKの問いかけが印象に残った。Kの憤りは、基本教科書やパンフレットに向けられるとともに、多くは支援者や教科書を作ってい

る研究者に向かう事も多かった。

むろん、さまざまな支援者との出会いがありがたかった事はその本の中でもKは述べている。その中で、異彩を放っているのが、農業を志したKがいきなりアポイントも取らず飛び込んだ、有機農業の栽培を手掛ける親方の逸話であった。親方は、突如農園に現れた見ず知らずのKに、最初は警戒感をにじませながら、徐々に親方なりの方法で、弟子として農業にKを導いてくれた。数人の仲間たちもいたが、仲間たちがKを障害者として特別扱いする事もなかった。Kが高次脳機能障害である事は誰も知らなかったわけである。その事がKをして大変居心地がよくなったといわしめている。

しかし、生計をたてるほどの仕事として有機農業が成立するわけではない。そこで、次の仕事を模索するKと出会うのが、視覚障害をもつ就労支援センターのリーダーであった。リーダーは「豆腐屋さん」にならないかというユニークな提案をKに行った。

支援センターがある商店街の一角に豆腐屋の幟をあげ、手作り豆腐を街角で販売する。収益は微々たるものであったが、毎日決まって街角に立ち続けたKはすっかり日焼けをし、かつとても充実した姿が印象的であった。

「豆腐屋のKさん」と買い物客や、たまに店番のお手伝いをしてくれる小学生たちとの何気ない会話には、高次脳機能障害という言葉は全く出てこなかった。しかし、「高次脳機能障害のKさん」となると話は全然違ってくる。「Kさん、大丈夫なの?」「ちゃんと覚えている?」「これほんとうにできるの?」

「豆腐屋のKさん」に大丈夫ですかと聞いてくる客はまずいないだろう。ちゃんと豆腐ができているか疑う客もいないと考える。この枕詞による変貌は何を意味するのかとても興味深い。

障害者就労支援は何が目的となるのかの整理が心もとない。むろん、経済的な自立が一番の目的となるはずである。しかし、ここに働く事の意義や社会参加の意味が問われるのも事実である。家計を支えるために働く事も重要だが、一番の根本とは幸せになるために働くという事である。高次脳機能障害のKはなにか不満そうで、豆腐屋のKはとても幸せそうであった。障害者としての社会的な役割と、販売員としての社会的な役割の比較として、幸せに近いのはどちらかは明確である。障害者の就労支援が、健常者モデルを基底として、基本高次脳機能障害を「できない人間」「未然な人間」として無意識なうちに対象と規定してしまっていることが大きな問題としてあげられる。

## おわりに

Kとの本づくりはいよいよ佳境を迎えている。本当にもう一息のところだ。些細な機会からその本づくりを手伝う事となった。その経験は、かなり手間のかかるものであったが、そこからの学びも大変大きなものであった。

3つのキーワードを今後の研究のために整理してみた。すなわち、「小さな溝」「逆算」「豆腐屋さ

んと高次脳機能障害」である。最後のものは「枕詞」にかえてみてもいいのかもしれない。

いずれにしても、Kがその半生のなかで感じた憤りに焦点をあてたケーススタディという事になる。高次脳機能障害が理解されていないという事の中身は、単に症状だけの問題ではなくむしろ、Kが生き抜いてきた仕事や暮らし、いいかえればまさに日常生活の中にこそ様々な論点があるはずなのである。Kが憤りを感じているのは、高次脳機能障害が「できない事」にイコールとなっている事であろう。

そのなかでも、筆者は「逆算」と「順当」の齟齬という観点が気になる。行動や行為の組み立てが違うのである。そこでどのようなすれ違いがおこるのか、今少し研究を深めていきたいと考えている。共生への手がかりがそこにある。

障害は人権の問題である。ある先達が筆者に教えてくれた言葉である。人権の問題は差別の問題とリンクしている。手元から結果にむかう「順当」の考えかたは、いかにして生産効率をあげるのかという功利主義に根差すものである。そして、それは組織の利益に適する人間を選別する優性思想につながる。筆者たちが社会に設けるルールや常識はKのいう「どうでもいい事」なのかもしれない。「どうでもいい事」にこだわり、Kを高次脳機能障害はできない事であるという縛りにくくりつけ、Kを白眼視してきた我々こそが、まさにKにとれば「障害者」そのものであろう。障害を受けるものと障害を作るもの、そのどちらを「障害者」と呼ぶのにふさわしいのかという論議がいま求められている。「逆算」を暮らしの手立てとして幸せになるために努力を重ねるKの憤りに真剣に耳を傾け、またその内容を分析する事が共生の糸口になる事を観点に、今後、研究の対象として追いかけてみたい。

## 引用文献

- 1) 「障害」の「害」のひらがな表記の取り扱いについて、大阪市ホームページ、ページ番号181235, 2012.9.  
<https://www.city.osaka.lg.jp/fukushi/page/0000181235.html> (参照2019-11-28)
- 2) 河原健一、高次脳機能障害の筆者が伝えたい事—失敗を積み重ねる経験を奪わないでください(仮題)、カフェ・ふくろう、2020春(発刊予定)。

## 参考文献

- 1) 林真帆、高次脳機能障害のある人を中心に据えたソーシャルワークの実践のあり方に関する研究—本人の力を活用した援助の検討、大阪市立大学博士論文、2016.3.
- 2) 介護福祉士養成講座編集委員会、障害の理解、中央法規、2019.3。(最新介護福祉士養成講座、14)。

(やまもと ながと：教授)

